

覚明房長西における『観無量寿経』九品段の解釈

那 須 一 雄

一 問題の所在 『観無量寿経』(以下『観経』)の九品段をいかに解釈するかということは、法然において大きな課題であった。法然の文献を検討すると、法然が『観経』九品段を解釈

する中で、最終的に説き示したことは、九品のどの機類の人であろうと、此土で廻心して定散二善を廃し、称名念仏一行を修すべきであることと、称名念仏の教えに帰依すれば、誰でも上品上生の往生ができるということであったと言⁽¹⁾える。

法然門下のうち、特に阿弥陀仏に対する他力の信を強調する証空、幸西、隆寛、親鸞等の諸師は、法然が目指した上品上生往生を報土往生と捉え、この報土往生ができるのは、阿弥陀仏への信が確立した行者に限るとした。そして信が未確立の行者の往生する土が化土であり、この化土往生について説かれたものが『観経』九品段であるとした。⁽²⁾ それでは法然門下のうち、法然教学を自力的な方向へ展開したと評価されている諸師においては、『観経』九品段はどのように解釈されていたのだろうか。本論では、覚明房長西を取り上げ、その

『観経』九品段解釈の特徴について検討する。

二 善導との比較において見出される長西の九品段解釈の特色 『観経疏光明抄』(以下『光明抄』)という、善導の『観経四帖疏』についての大部の釈書を著していることから、長西における『観経』九品段解釈は、基本的には、善導の教学的立場に基づきながら示されたものであると言える。長西の九品段解釈の特色のうち、善導に基づいて示されたものとしては、以下の五つの点を挙げることができる。

まず第一には、『観経』九品段の原文に説かれる通り、九品の機類が、それぞれの機に相応した九品の浄土に往生するとする立場を示している点である。則ち長西は、上品上生の機類は上品上生の浄土往生を、下品下生の機類は下品下生の浄土往生をすると見ている。第二は、これら九品の機類の此土における在り方について、信と行いの二方面から見ている点である。第三は、信については『観経』上品上生段所説の三心(至誠心・深心・回向発願心)を、九品の行者が必ず具さ

覚明房長西における『観無量寿經』九品段の解釈（那須）

一一〇

ねばならないものとし、この三心に浅深や勝劣はないとしている点である。⁽⁴⁾ 則ち長西は、信心の程度によって九品の機類を分けることはないという立場を取る。⁽⁵⁾ 第四は、九品の行者の此土における行業について、九品段に説かれている通りの差異があり、そこには浅深や勝劣があり、⁽⁶⁾ これらの違いにより、浄土往生の在り方について九品の差異が生ずると見ている点である。⁽⁷⁾ 最後に、これら九品段に説かれる行業について、念仏と諸行という観点から見ていった場合、長西においては、上三品と中三品に説かれるのが諸行、下三品に説かれるのが念仏と認識しているということになるが、⁽⁸⁾ これも善導の立場をほぼ継承したものであると言えよう。

以上のような長西の立場は、ほぼ善導の解釈に基づいて、自己の教学的立場を示したものと言える。だが長西の九品段解釈には、善導の所説と明らかに異なる点も見られる。以下、この点について述べる。

まず第一点目としては、九品の階位について、上品、下品、中品という順序の価値判断をしている点が挙げられる。則ち長西に依れば、中品三段は小乗の行を説いたものであるもので、浄土における証果も小乗の解釈に拠るものであるのに対し、下品三段は、大乘仏教による救済過程を説いたものである。浄土における証果も大乘の解釈に基づくものである。それ故に、下品三段は上品三段の次に位置すべきものである。

り、中品三段は、下品三段よりも下に位置すると見ている。⁽⁹⁾

また『観經』上品上生段では、浄土往生後の「華合の障り」⁽¹⁰⁾ については説かれておらず、善導もこの点について、『散善義』に「從生彼国已下正明金台到彼更無華合之障」（真宗聖教全書一—五四四）と述べているにも拘わらず、長西は「華合の障り」が説かれていると見ている点も注意される。⁽¹¹⁾

三 法然との比較において見出される、長西の九品段解釈の特色 長西の『観經』九品段解釈を、法然のそれと比較すると、次のような特色が見られる。

まず第一に、冒頭にも述べたように、法然は、九品のどの機類の人であろうと、此土で廻心して称名念仏の教えに帰依すれば、誰でも上品上生段に説かれる往生ができると説いていた。だが、上記二においても述べたように、長西は善導教学に基づいて、九品の機類がそれぞれの機に相応した九品の浄土に往生するという立場を示している。この点において両者の立場は明らかに異なっている。また第二に、法然は『観經』九品段のすべてに念仏と諸行が説かれていると見ていたが、⁽¹²⁾ 上記二に示したように、長西は、上三品と中三品に説かれるのが諸行、下三品に説かれるのが念仏という認識をしている。第三に、法然は九品段に説かれる念仏と諸行との関係について、諸行を廃して、念仏一行を立てるという廃立義に自己の教学的立場の中心を置いていたが、長西は、諸行すべ

てを往生行として認める傍正義に中心を置いている。⁽¹³⁾ 第四に、以上のような長西の九品段理解からすれば、上品上生の往生は、念仏以外の諸行を修することにより成就するのであり、下三品の機類のために説かれている念仏によつては上品上生往生は果たせないということになり、⁽¹⁴⁾ これも長西における教学的特色と言える。以上のような点が注意される。

四 法然門下諸師との比較において見出される、長西の九品段解釈の特色 法然門下のうち、特に阿弥陀仏に対する他力の信を強調する上記のような諸師と、長西の立場とを比較すると、次のような特色が見出される。

まず上記二でも述べたように、長西は『観経』上品上生段において「華合の障り」が説かれているとする立場を示した。さらに九品段のうち華合が説かれていないもう一つの段である『観経』中品下生段についても、華合が説かれているとする立場を示している。⁽¹⁵⁾ つまり長西は『観経』九品段のすべてに「華合の障り」が説かれているとする立場を示しているということになる。このうち中下段については、前後の段において華合が説かれていること、そして本段に「生経七日」（真聖全一―六三）とあり、善導もこの点を捉えて、華合が説かれていると見ていることから、そこに華合を読み取ることとは自然なことであろう。だが上品上生段については、上記のように善導も『散善義』の中で華合の障りはないとする立場を

示しているので、この段に対する長西の立場は注意される。則ち、冒頭にも述べたように、法然門下のうち、特に阿弥陀仏に対する他力の信を強調する諸師は、他力の信が未確立の行者の往生する土は化土であり、この化土往生について説かれたものが『観経』九品段であるとした。この立場に立つならば、少なくとも論理的には、これら諸師も九品段すべてにおいて華合の障りが説かれているとする立場、即ち上上段にも華合の障りが説かれているという立場に立っているということになる。則ち、両者は九品段すべてに華合の障りが説かれていると見る点において、同じ立場に立っていると言える。

次に上記二でも述べたように、長西は、九品段のうち、上品段と下品段を大乘の救いを示したものであると見、中品段を小乗の救いを示したものであると見ている。従つて、長西においては、阿弥陀仏に対する信を強調する門下諸師が示していたような、行者が真実の浄土に往生した直後、平等に到達できる菩薩の階位については説き示されていないということが言える。この点には両者の立場の違いを見出すことができる。

さらにもう一点、注意されるのは、他力の信を強調する法然門下諸師は、『観経』九品段について論じる際、報土・化土という視点から捉えていた。だが現存する長西の文献を検討すると、長西において「報土」「化土」という用語は一箇

覚明房長西における『観無量寿経』九品段の解釈（那 須）

一一二

所も用いられていない。門下の阿弥陀房が、『光明抄』において、通論家の教学について説明する際に用いている箇所があるのみである。⁽¹⁶⁾この違いにも注目しておきたい。

五 長西における『観経』九品段解釈の背景 以上、長西の九品段解釈について、善導、法然、法然門下諸師の解釈と比較しつつ検討した。本節では、長西において上記のような解釈が展開される背景について考えたい。

まず長西においては、上記のように、法然が展開した独自の九品段解釈を継承せず、善導の解釈に基づいて自説を展開している。また『観経』三心解釈における自力的傾向、念仏と諸行を傍正義で捉えている点等には、聖道教的な展開も読み取れる。この傾向は既に論じたように、「専修」解釈等にも見られるものである。⁽¹⁷⁾長西は、法然没後、覚瑜、俊苒等に学んだことが伝えられるが、以上のような解釈からは、聖道諸宗からの法然浄土教批判を踏まえて、これらの諸師の思想の影響を受けつつ、改めて浄土教学を再構築しようとした長西の立場が窺われる。

また四で述べた、上品上生段において「華合の障り」を読み取っている長西の立場が生じる背景としては、九品段すべてに華合の障りが説かれているとする、上記のような、他力の信を強調する法然門下諸師⁽¹⁸⁾と共通の教学的立場に立ちつつ、しかも自分は、九品段に説かれる華開後の九品の浄土こ

そが、浄土教の行者が目指すべき真実の浄土であるということを示そうとしたという見方ができるのではないだろうか。⁽¹⁹⁾

さらに長西においては、念仏行者が浄土往生の直後に平等に到達できる菩薩の階位や、報土化土説については説き示されていなかったが、これらの点についても、他力の信を強調する門下諸師と、浄土往生理解において一線を画するために敢て説き示さなかったということが考えられるのではないか。

六 結論 長西の九品段解釈では、念仏を正行とし、下品三機を浄土教の本意とする点において、法然浄土教の理念の継承が窺える。だが長西は、九品の機類がそれぞれの品に示される行業に依り、それに相応した九品の浄土に往生するという立場を示す。これは法然よりはむしろ善導の教学的立場に近い九品段理解である。また九品全体に華合の障りが説かれていると見ている点、浄土往生の直後に平等に到達できる菩薩の階位を示していない点、報土化土説を用いていない点には、他の法然門下諸師の教学的立場を意識して、自己の教学の独自性を打ち立てようとした長西の立場が窺われる。

1 拙稿「法然上人における『観無量寿経』九品段の解釈」『龍谷教学』三三、一九九八年。

2 拙稿「法然門下の「往生」理解」『印度学仏教学研究』五八―一、二〇〇九年。

3 「韋提厭欣心分齊今開為散機説三心也：今三心上々品諸行中

説之隨樂惣相往生安心故至下々品称念令通之如此」(宗学研究會「金沢文庫所藏觀經疏光明抄散四の本文と解説」(以下略)『宗学研究』(以下『宗研』)一五号—一〇三頁(以下「号」「頁」は略)、一九三七年)。「隨機顯益者三心説上々巨九品意也」(『宗研』一四—一五五、一九三七年)。

4 「又就三輩往生三心有淺深歟。答不可有。有引業者淺深故也。若有可去行分也」。「今三種者為有淺深如何。答爾也。約心解無淺深：約行相可有淺深」(『宗研』一五—一〇四、一〇六)。

5 長西はこの三心について、自力的な色彩の強い解釈をしている。「至誠心薰成猛利心也」(『宗研』一四—一五五)。「云能生清淨願往生心即聞強盛」(『宗研』一五—九九)等。

6 (註4)の『光明抄』の文参照。

7 「但今經説此人精進勇猛故云也。故上品中生釈云由行強故上々即金剛台由行劣故上中即得紫金台」(『宗研』一五—一二六)。「惣案九品來迎上々依正共來中間七品正報許來下々品依報許來此則機分勝劣也」(一六—一四五、一九三八年)。

8 「下輩三人散善念仏也」(『宗研』一五—一〇〇)、「念仏者下三品念仏也。：上六品諸行也」(一六—一五五)。「下品上生念仏事：下品中生念仏事：下品下生念仏事：」(一六—一二六)。

9 「又上下釈十劫等事者、中輩者小乘行也。下輩者大乘益也。故上品下生者超中輩次下品上生也。此意上下釈十劫也。下輩者雖過惡者所行法既大乘法也。往生已後得益直得大乘益也。故可隣上輩也」(『宗研』一五—一二二)。「但今罪惡生死凡夫等者明下輩三人此即淨土教本意」(『宗研』一四—一六五)。

10 『觀經』では、行者が淨土の世界に至った時は、華に包まれた状態(※善導は「華合」と言う)であり、華開後、見仏聞法等がなされると説かれている。華合の間は、まだ見仏聞法等

覺明房長西における『觀無量壽經』九品段の解釈(那 須)

が出来ないので、善導はこのことを「華合の障り」と言う。

11 「金台到彼更無花合之障等事。疑云蓮花化生之習開合具足何必為無障歟。答此疑意花習開合具足故以合何□□□□疑也。具之但○○花夜合昼開。往生人所居花□爾有障。称□□開今故云見仏聞法故花合為障也。又若無花合者十一門中花開遲速可闕之歟。答爾也花開遲速從多分也」(『宗研』一五—一一七)。

12 (註1)の拙稿参照。

13 「正行者傍正邪正中何歟答傍正也」(『宗研』一四—一七八—一七九)。「万行皆為成仏因為往生因」(二四—一五九)。

14 長西は、『觀經』下三品の機類のことを「淨土教の本意」であるとは述べている。(註9)の『光明抄』の第二文参照)

15 「疑云此品不説花開之義□云第十門歟。答爾也文隱顯也。有道理故釈也」(『宗研』一六—一二四)。

16 「謂致往生留難事限通論家也。其故極樂判報土機分利凡夫故不可生極樂報土也」(『宗研』一四—一七七)。

17 拙稿「覺明房長西における専修理解について」『宗教研究』三三九、二〇〇四年。

18 但しこれらの諸師が、上々段の華合を認めていたとは限らない。例えば隆寛は『散善義問答』でこれを否定する。(『隆寛律師遺文集』六六頁)この様な教学的矛盾は、門下諸師の淨土教學構築の中で、ある程度生ぜざるを得なかった事であろう。

19 だが門弟の阿弥陀房は、上々段に華合を認めることを、私釈で否定している。(『宗研』一五—一二〇、一二一)

〈キーワード〉 長西、法然、法然門下、『觀無量壽經』九品段
(龍谷大学大学院修了)